将来の日米戦争は避けられない

こんにちの資本主義世界には、利用すべき根本的対立があるであろうか？　三つの基本的な対立がある。私はそれをあげてみよう。第一の、われわれにもっとも近い対立――それは、日本とアメリカの関係である。両者のあいだには戦争が準備されている。両者は、その海岸が 3000 ヴェルスタもへだたっているとはいえ、太平洋の両岸で平和的に共存することができない。この競争が彼らの資本主義の関係から生じてくることは、争う余地がない。将来の日米戦争という問題をあつかった膨大な文献がある。戦争が準備されつつあること、それが避けられないということ、このことには疑いの余地はない。平和主義者はこの問題を回避し、きまり文句でそれを塗りつぶそうとつとめているが、経済的諸関係と外交の歴史を研究しているすべてのものには、戦争が経済的に成熟しており、政治的に準備されつつあることは、一点の疑いもありえない。この問題をあつかったどの本をとってみても、戦争が成熟したことを見ないわけにはいかない。地球は分割ずみである。日本は、膨大な面積の植民地を奪取した。日本は 5000 万人の人口を擁し、しかも経済的には比較的弱い。アメリカは 1 億 1000 万人の人口を擁し、日本より何倍も富んでいながら、植民地を一つももっていない。日本は、4 億の人口と世界でもっとも豊富な石炭の埋蔵量とをもつ中国を略奪した。こういう獲物をどうして保持していくか？　強大な資本主義が、弱い資本主義が奪いあつめたものをすべてその手から奪取しないであろうと考えるのは、こっけいである。こういう事態のもとで、アメリカ人は平然としていられるであろうか？
強大な資本家と弱い資本家とが隣りあわせていながら、前者が後者から奪取しないと考えることができるであろうか？　もしそうだったら彼らになんの値うちがあるだろうか？
しかし、このような情勢のもとで、われわれは平気でいられるだろうか、そして共産主義者として、「われわれはこれらの国の内部で共産主義を宣伝するであろう」と言うだけですまされるであろうか。これは正しいことではあるが、これがすべてではない。共産主義政策の実践的課題は、この敵意を利用して、彼らをたがいにいがみ合わせることである。そこに、新しい情勢が生まれる。二つの帝国主義国、日本とアメリカをとってみるなら――両者はたたかおうとのぞんでおり、世界制覇をめざして、略奪する権利をめざして、たたかうであろう。日本は、あらゆる最新の技術的発明と純アジア的拷問とを結びつけた前代未聞の残虐なやり方で朝鮮を略奪しているが、この略奪をつづけるためにたたかうであろう。つい最近われわれは、日本人がなにをやっているかをかたっている朝鮮の一新聞を受けとった。ここにはツァーリズムのあらゆる方式、あらゆる最新の技術的進歩と、純アジア的拷問制度、前代未聞の残虐性との結合がある。しかし、この朝鮮というおいしいご馳走を、アメリカ人はもぎとろうと考えている。

第 31 巻『ロシア共産党(ボ)モスクワ組織の活動分子の会合での演説』P449～450
1920 年 12 月 6 日

三つの基本的な対立……日本とアメリカとの矛盾
アメリカと、残りの資本主義世界全体との矛盾
協商国とドイツとのあいだの矛盾